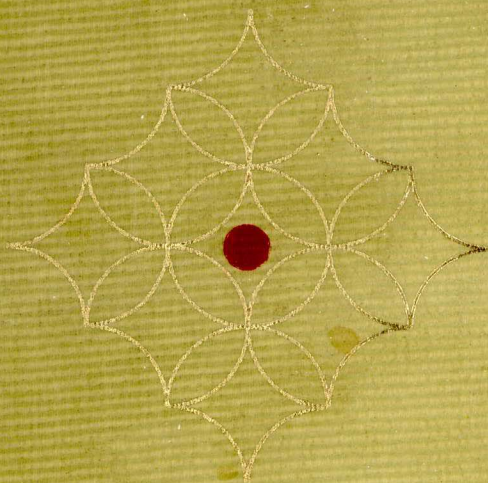




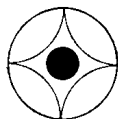
現代日本文學大系

81

野 間 宏 集
武 田 泰 淳



筑 摩 書 房



現代日本文學大系 81

昭和四十七年六月五日

初版第一刷発行

野間宏・武田泰淳集

著者

野間 武田 泰淳

発行者

野間 武田 泰淳

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 10081 (出版社) 4604

野間宏集 目次

卷頭写真
筆 蹟

暗い絵

二つの肉体

顔の中の赤い月

第三十六号

崩解感覚

悲しい錘

車の夜

わが稲妻

へチマ顔と石頭と

三

四〇

四九

五〇

五七

一〇六

一二六

一三五

一六五

武田泰淳集 目次

卷頭写真

筆 蹟

秋風秋雨人を愁殺す

司馬遷伝

才子佳人

蝮のすえ

非革命者

女賊の哲学

異形の者

一五

二七

二七

二五

二七

三三

三三

〔付録〕

野間宏

杉浦明平 三二

野間宏

平野謙 三三

武田泰淳

山本健吉 三四

武田泰淳論

江藤淳 三五

年譜

四三

著作目録

四三

野間
宏
集

まだ癒えぬ
その傷は柔
かい沈黙の肉
を噴いた
野間 宏

暗い絵

一

草もなく木もなく寒く吹きすさぶ雪風が荒涼として吹き過ぎる。はるか高い丘の辺りには雲にかくれた黒い日に焦げ、暗く輝く地平線をつけた大地のところどころに黒い漏斗形の穴がぼつりぼつりと開いている。その穴の口のあたりは生命の過度に充ちた唇のような光沢を放ち、土饅頭の真中に開いているその穴が、繰り返される、鈍重で淫らな触感を待ち受けて、まるで軟体動物に属する生きもののよう、に幾つも大地に口を開けている。そこには股のない、性器ばかりの不思議な女の体が幾重にも埋め込まれていると思える。どういうわけか、ブリュッゲルの絵には、大地にこのような悩みと痛みを感じ、その悩みと痛みと疼きによってのみ生存を主張しているかのような黒い円い穴が開いているのであろうか。遠景の、羞恥心のない女の背のようなくぼみのある丘には、破れて垂れさがる傘をもった背の高い毒茸のような首吊台がよきによき生えている。そして長い頸と足をもった醜い首吊人がひよろ高い木の枝にぶらさがり、長く伸びた爪先がひらひら地の上に揺れている。その傍には、同じように背の高い体の透いて骨の見える人々が長い列をつくって、首を吊ろうと自分の順番を待っている。痙攣した神経をあらわに見せる襦袢の汚れた頭のよくに、何か腐敗した匂いを放って揺れている叢。

遠く、黒い地平線と交叉して立ちならぶ、木の葉一つない枯木のよな首吊台。その中の一、番高い裸の手を上げたような一つの首吊台を眼がけて、飛び集って来る声のない黒い鳥の群、鳥達はこの地平線を

越えて、この大地の上に姿を現わした時、あの醜い嗄れた声さえ失ってしまったのかと思われる。その先頭の、一羽の鳥は部厚い羽を不恰好に折りたたみながら、何か深い悲しみに捉えられて頭を垂れている。そしてひよろ長い首吊台の上に足を揃えて身を停めようとしている。絵のほとんど中央には、磔刑にされたキリストの体が、半ば膝をつくように十字架の下に横たわっている。このキリストは、何の苦しみの表情も何の悲しみの表情もなく、むしろ無表情の薄っぺらい顔貌を持ち、それを取りかこむ人々の群が黒々と画面を取りまいていて。

またこちらには、爬虫類のような尾をつけた人間が股をひろげて腰を下し、尖った口の中から汚れた唾液をはきかけている。その股のあいだには、やはりあの大地に開いていると同じ漏斗形の穴がぼかりと開いていて、その性器が、性器の言葉があるとすれば、その言葉でしゃべっているように思える。そのすぐ後には四つばいになった獣が、何か不潔な傷のためにいまにもちぎれそうになった尻尾を、地面に引きずりながら、こちらを向けた顔だけは人間の形をして、苦しい嘆息の呼吸を続けている。

蛙の水かきの皮を五本の指の間にもった人間、ひとでのように幾本もの足を体中にはやしている人間、人間の足をつけて歩いている魚、それらがそここに匍匐うている。これらの人間はまるで性器以外には何等の営みの機関をもちえないかのである。そしてその部分で食い、その部分で笑い、その部分で慥くのである。匍匐しているこれらの尾のある人々の傍に、低い木の切り株が切り口から細い幾多の枝をさしのべ、舌を出し、それは焦がされた慾望と腐敗した肉体の匂いを放っている。ひとの股の形をした枝やもつれ合う毛や、嘲笑する機関がその切り株の後のまばらなくさむらの中にちらついている。そのくさむらの前にやはり尾のある人間が、足を開けて坐り、何か自分の受ける苦しみがあまりにも大きすぎてというよりも自分の生活には苦しみ以外にないので、自分の生活を苦しみという言葉で表情する術さえ知らぬ無表情なそげた顔をして、自分の股の間にあいているあの暗

い穴をじつと見つめている。暗い少しの華やかささえないあらわに淫蕩な眼が、これらの風景を何処からか見つめている。それは淫蕩などではない。押しつぶされた生命がただどこか最後の一局部で生きている、こうした暗い不潔な醜い部分にのみ生きているのをその不潔な部分が羞恥しているのである。否、それは羞恥でもない。それは羞恥のような高貴な感情ではない。たしかにこの尾を持った匍匐っている人間のどこにこうした高い感情があるなどと言えるであらうか。或いはまたそうした感情をあつ尾のある肉体の何処の場所で見現するのであらうか。この醜い大地にぽっかり開いている穴は、ようやく人類のルネサンスを迎えようとする歴史の中で、ズバズバに切り刻まれたアミバーがなおも生き続けるようにようやく生れ始め発生しつつあった個人、個体の跡形だというのであらうか。たしかにその黒い穴は何かを愁訴している。何かを訴えたげにしている。自己の存在をこうした醜い形の中にでも示そうとしている。あの尾のある匍匐うっている人間が、何か奇妙な魂のように股の間に大事につけているこの穴。たといキリストの磔刑の姿の中に穿たれていてさえ不思議には思えぬ黒い輝きのように穿たれ、開き、蠢動しているこの穴、また、そこには頸の短い乞食がいる。足の曲った気狂いがいる。冷酷な賦役、重い岩のよいうのしかかる農奴制の下に背中がもった農夫がいる。農夫はやせて、寒そうに汚いぶくぶくの上衣に身を防いでいる。盲人がいる。乞食は大きな二股に開いた木の足をつけ、松葉杖に代る短い棒をついている。乞食の背中には太い狐の尻尾が何本も縫いつけられて、歩くたびにそれが揺れる。それは揺れながら滑稽にひらひらする。これが乞食の笑いなのである。当時の支配者スペイン王フィリップ二世の専制政治に対する嘲笑なのである。そこには人間への嘆きがある。憐憫がある。人間の不正や、恐しい凡庸や、不公平に対する戦いがある。憐憫がある。さらに高い愛がある。これらの化物を支えている精神の中には人間の矮小な姿の中に閉じこめられて燃えている深い愛があり、貧困に対する痛烈な憤怒がある。無智と愚昧と冷酷に対する反抗がある。そ

してそれらが苦悩の上に強い姿となって、烈しい形をとって、姿を現わしている。そして、ここには群衆への、集団への、民衆への強い執着がある。人々は集団以外としては現われない。祭の夜の、風景の中の点描としての、むれた蛙のような人間の集りとしての、髑髏をつけた人間どもの群としての、犬をつれた獵人がかえって行く農村の営みの中の人々の群としての、集団以外としてはあらわれない。そして、ここには民衆の最後の武器である笑いといふ諷刺があるのである。

これはフランドルの画家、百姓ブリューゲルの絵画集から深見進介の得た印象——奇妙な、正當さを欠いた、絶望的な快楽に伴うごとき印象、そしてまた、そうした暗い快楽の深い穴の中で無益に呻きもがいているとも言えるような印象の集りである。真白のフランス縋の部厚い菊判大の絵画集。これを深見進介に貸し与えた友、また彼と共にこれを繰り返し眺めた友は、ほとんどすべて若くして獄死しなければならぬという生涯をたどったのである。そしてこの画集もまた数知れぬ白い輝きを連ねて夜空を押し渡り襲うて来るB29の重い翼の嵐の下に、はね上る油玉と共に燃え、ただ曲りくねった鉛のガス管や、紫色に焦げてゆがんだ裸の鉄骨や熔けて薄緑に固まったガラスの塊りなどの間に、形もない灰となつて残ったのである。この写真版の絵画集が、油脂焼夷弾の飛び火を浴びて、綴り合わされた絵の一枚一枚が、流れる黒い液体のような炎の中に焦げてはがれながら燃えていった時、この絵の中のひとりのような人間、犬の顔をつけた人間、尾をつけた裸の人間、あの暗い爛れたような穴を大事そうに股の間にもっている人間達が大きな如何なる力をもつてもとどめえない火災のあつてはてりの中で、すでに紙の下に廻った小さい炎のために次々と火あぶりにされ、その汚い厭な正視し得ぬような肉体を焦がし、醜い体を火のためにさらに醜く瘻癰させるかのように歪めて、しばらくは燃えて行く紙の火の中に明らかな形で姿を現わし、焦げる紙の上にあぶり出しの字のように黒々と線をつけ、そしてやがてそれらの体も火となつて消えていった時、大阪全市は南の空から北の空へかけて、燃える炎

であかあかと明らみ、急速な生命の危険をつたえる重い脅かすような響きを拡げながら、空を押し渡る機械の風が、幾千という巨大な鈍い光を湛えた重い翼の幾重もの重なりが、炎の明るみの中に次第に大きな大阪市の全景をくつきり表わしてくる街の上に濛々とこめた火炎を越えて過ぎ渡ってゆき、この空の中を押し移ってゆく、限りないモーターと大きな機械の重みに押しひしがれながら消えてゆく、奇怪な穴を持った人間共のうめきが、何処かその炎の中から聞えたかも知れないのである。このとき、画集の置かれていた工場の寄宿舎の居室が焼けてゆくのを見ながら、深見進介の心はいよいよ暗く、防空頭巾と鉄帽の下彼の顔は、大きな戦争が彼の生命から呼び出した生き生きとした生命の緊張のために輝いてはいたが、さらにいっそう暗かった。その時、或る軍需工場の一部門の責任者の位置にあった彼は特設防護団のいかめしい服装を着けて、この画集の置かれている部屋に移ってゆく炎を地面に立てた長い鳶口に寄りかかるようにして、苦しげに眺めていたが、すぐ消火作業のために団員を指揮する位置に走り去りながら、そのひとでのような足をもった人間達が、暗い闇の中で燃え上り焼け焦げるのを思うと、彼の心の中を何か震えおのくような感情が走り、彼の顔は鉄帽の下で、ちょうどその絵の中の人間の焼け爛れてゆくときの苦しげな表情を、赤々と燃える火に映えて示したのである。

この画集に眼を止めたものはあまり多くはないと言える。というのは、深見進介はこの絵画集を大事にしている、あまり親しくないものには決して見せることはなかったから。あるいはまたこの画集の意味を解こうと努力するものは、また少なくともこの絵画集の荷なう暗い感情に意義を認めるものは、あまり多くはいないに違いないと思ったからでもあったが、まずこの画集を彼に貸し与えた永杉英作、その友羽山純一、その友木山省吾、その他二、三のものがこの画集を眺めたことがあるだけであると言える。彼は始終この画集を手元に置いてはいたが、学校生活を了え社会に出るようになってからは、かたくなに

誰一人としてこの画集を見せようと思う人間には出会わなかったのがあった。学生時代の友、永杉英作、羽山純一、木山省吾、これらの人は彼が京都の大学に在学中、共に学び、共に闘い、共に苦しみ、時には共に放蕩し、また、共に意義なく時間を過した人々であった。支那事変の勃発の前後にわたる彼等の青年の時代、それは青年の強烈な精神が日々に光を放ち、ことごとくに激越な調子の表われる、排他的な口論と嘲笑と自己嫌悪と傲慢との奇妙に混合した三年間であった。友人達は若くすべて偏狹であったが、その偏狹によって皆は、美しい精神を保持し、互いに切磋した。世の中にあつては正に何億の金に見つもっても買えないあの純真を惜しげもなく使い果し、不思議な表現ではあるが本能的な誠実の衝動が現われると、如何なる障害も止めえず、如何なる恐怖も阻止しえぬ生命の自由の羽ばたきが、人々の額を輝かせていた。これらの友はいずれも、青年時代のこの生活をいつまでも持続しようとしたため、戦争が進行するにつれて、あるいは民間の刑務所につながれ、あるいは第一線から飛行機で内地に送られ軍の監獄に収容せられたのである。しかし、これらの人々の眼も、それほどしばしばこの画集に注がれたとは言えないのである。というのは、この画集を見るのは、あまり楽しいものではなかったから。むしろこの絵の集りは、見る人々の各自の置かれている社会的な位置、その家族の関係、各人の女との交渉、各自の思想等の暗さをそれぞれ各自にあまりにも強く思い起させたから。

深見進介が初めこの画集を見つけたのは永杉英作のアパートの一室であった。それはその部屋の右隅の大きな白木の本棚の一番下の段の右端に置いてあり、いつも緑地の蔽い幕の端からはみ出て、その部屋に入る度にその純白の部厚い大きな画集の背が彼の眼を射るのである。形が大きく本棚の上の段には入らないので、永杉英作は茶碗や食器類を置くのに使っている本棚の下端の一番右隅に置いていたのである。深見進介はときにひとりで、その本棚からその重みのある画集を取り出し、また時に共に頁を繰り、時に共にその絵について語り合ったの

である。その画集の中の暗い、嘆きのような、痛み、呻き、疼いて
 いる人々の多くの姿は、彼にあらわに、彼自身の苦しみを思い起させ、
 彼はそれらの絵を見まいと思ひながら、しかしやはりその絵のもつ何
 か不可思議な力にひかれてその頁を繰ることになるのである。しかし
 このブリューゲルの絵が特に彼に強く逼り、彼の心に強い力の反射の
 ように照りつけて来たのは或る夜のことである。

当時彼は全く切りつめた生活をし、彼の不幸な恋愛はほとんど破綻
 に近づいていた。そして彼の幾分長形の顔はその感情が激越に調子づ
 いてくると、何かの拍子でほんの一瞬救われたように頬の辺りが少し
 美しく見え、くぼみの深い眼窩に溢れる涙でしばしば洗われるという
 状態であった。こうした熱い涙が顔をぬらす時、彼は肘や尻の部分の
 すりきれて光っている黒サージのみすばらしい学生服姿の自分を忘れ
 去ったが、その涙の訪れぬ不断の時期には自己に対する過信と絶望、
 謙虚と傲慢、野心と敬虔とに交互に見舞われ、烈しい活力から烈しい
 疲労に移り変る時を過すのである。そしてそれらの根柢に、自分自身
 に対する不満と社会制度に対する憎悪があった。その日も深見進介は
 朝からいつものように焦躁を感じ自分のそうした感情を制御しながら
 も幾分いらいらしていた。青年によく見られる自分の周囲のものがす
 べて自分に敵対しているような感情が彼を襲うていた。

大阪府庁に席を置き、いつまでも小官吏の地位にいる父がその朝手
 紙を寄越し、この月は母親が病氣のため思わぬ費用が要り、節約第一
 にして欲しいと言って来たのである。読書費は今月はなしに済ませて
 欲しいと言い、最後にこれは手紙の度毎に父の書く文句であったが、
 思想問題に注意して日頃の賢明をもっていたが、徒党に与せぬ方針
 を堅持されたしと結んであった。深見進介は屋近くその為替を封入し
 た書留郵便を受取った。そしてその手紙をよこした父に腹を立てた。
 しかし彼は自分のその怒りの中から金銭の圧力が、彼の身をしめつけ
 て来るのを感じた。それは或る意味で哀れな醜い自由を失った感情で
 あり、彼は自分のその感情の後に、汚れた光を放っているような父の

姿を見出し、それをじっと見つめるようにした。父の姿が浮んでくる。
 それはその金銭の圧力感の中から形をとり、現われてくるのである。
 それは金に押し潰された種族の顔である。優しい心の働きを金に奪い
 取られたもののもつ顔である。金の中の老衰の表情である。左にゆが
 んだ長い鼻隆、瞼の肉の薄い眼、短い眉。この眼は遠くを見ない。人
 人の顔の中で何を読み取ろうとするのか、しばしば小さく動く。しか
 も哀れに小さく動く。茶色に近い瘦せた頬、それは卑屈に属し、硬化
 した咽喉の辺りの皮膚、これは労苦に属している。そしてこれら父の
 表情を縛っているものは金銭である。

深見進介はいわばその父親の顔を心の中に抱きながら、その日一日
 を過したのである。学校の講義に出たがそれは型通りに終り、すぐ宿
 に帰り、ドイツ語の勉強を始めたが抄らず、一日を無為にすごすとい
 う思いが、彼の心を堪え難いものにした。そして夕暮の気配が部屋の
 窓や机の上の書物に影をつけ始めると、深い悲しみというような一種
 の落ちつきさえもない、価値などに全く関係のない焦躁に貫かれて、
 いつものように永杉英作のアパートに足を向けた。しかし深見進介は
 永杉英作のアパートに着くまでに食堂に立寄りそこで再び金の問題に
 出合い、そしてさらに、その当時の思想運動と呼ばれる小さな哀れな
 動きに出会わなければならなかった。街の金貸しと街の思想運動家達
 が彼の途中に待っていたのである。そしてそれは金貸しと思想運動家
 と、こういう風に二つを並べて書いても少しも不思議ではない程どち
 らも哀れな汚れた存在であった。

二

既に日の暮れた神社の境内の曲りくねった坂道を下り切ると、小さ
 い暗い煙のような冷たい暈をつけた電燈が電柱の高いところであって、
 十字路になった少し広い道をぼんやり照している。その角の山際に沿
 うた二階建の屋並の三軒目の表口の硝子戸が明々と光を道に投げてい
 る。深見進介は硝子戸を開け、意外に明るい食堂の土間に入って行っ

た。安物の白塗料を用いてある部屋の新しい四圍の壁には白い電燈の光が照り返っている。店の間には左隅のテーブルの角の所で高等学校の学生が、空になった食器膳の上に夕刊を掲げてテーブルに乗りかかるようにして読み入っている他、客は誰もいない。妙に時刻はずれの空気が部屋を充たしている。厚い松材に少しそり返って罅割れた六尺テーブルの上に、粗末な長い竹箸を入れた竹筒の背の高い箸立や、白い安物の湯飲み茶碗をふせた、木のくり抜き盆、アルミの大きい湯沸しが冷い影をつけている。この食堂に足を入れた時、深見進介の中背よりは少し大きい身体をつつんだ垢じみた学生服の姿は、光の中にぱっと浮び出、一步敷居をまたいで店の奥の方を窺っている顔は電燈の光で断つては陰影の深い形を見せ、長い眉根やこめかみ、上方の辺りの曇った暗い表情の中に、若いもの達の顔に表われる、あの自意識と対人意識の皮膚の緊張が走るように思えた。

「いらっしゃい。」親父の声が太く響いた。深見進介はテーブルの横を廻り、顔をふせるようにしながら、真直ぐにその声の方に寄って行った。台所口に続いた中の三畳の間の仕切りの暖簾の間から大きな鼻と大きな耳をつけた大柄の親父の顔が、客の姿をじっと見定めるように覗いている。それはまるでその親父の大きな鼻だけが、そこから覗いているかのように思える。《鼻奴、鼻奴、》深見進介は何故ということもなく心の奥でこう思った。するとこの言葉と共に、その時まで彼の心の深みに沈んでいた一つの押しつけるような圧力があらわな、眼に見える力となって現われ、彼の行手を遮るかのようになら。それは新たに姿をもつて現われた金の圧力であった。深見進介の足は一瞬土間の真中で止った。彼は彼の心の片隅に自分の父親の顔を思い浮べた。あの短い半白の眉の中の弱い、伏せがちの父の視線が浮んで来た。「いたずらに徒党に与せざる方針を堅持されし。」この父の言葉が彼の頭の中をちらと走り過ぎた。しかし彼は頭を左右に振ってこれらの言葉や姿を自分の心から振り落すようにしながら、親父の方に近寄って行った。奥の間の騒ぎが聞えて来た。深見進介はそれに気づい

た。そして彼は何故か自分の姿を隠そうという気持ちに襲われた。それは彼の同級生の小泉清達の集りであった。店の間に続いている、少し暗い電燈の六畳の間で将棋盤を囲んで、いつものように食後の時間を過しているのである。深見進介は言葉もかけずにその傍を抜けるような気持ちで黒と赤の染分けの暖簾の方に進んで行った。そして暖簾を分けて上半身を斜めにしながら、胸から上を三畳の間の親父の大きな角火鉢の上に突き出すようにした。「今晚は。」深見進介は低い声で言った。そしてまるでこの厭な親父の鼻の形を見るのが自分に課した罰でもあるかのようにじっと親父の顔を見つめた。

「やあ、いらっしゃい。」親父は顔を上げた。が、彼の厚いふくれた右頬の上を狼狽の影が通り過ぎた。そして、次の瞬間訪問者の心を一撃の下に打ち挫くような堪え難い色が眼に表われ、顔全体に拡がってゆくように思えた。

「やあ、いらっしゃい。どうしたの。深見さん、今夜はえらく遅いじゃあないか。もうおでんの火、落してしまっただけで、それでよけりゃあ、お上んなさいよ。」親父の冷たい顔の肌の下から笑いの表情が表われて来た。しかし深見進介は自分の心の底まで冷し込んでしまうような先刻の親父の顔を忘れることは出来なかった。親父はたしかに彼がこの暖簾をくぐってこの三畳の間に姿を現わすことを予期していなかったのである。というのは親父は二重の眼をもっていたから。食堂経営の主人の眼と高利貸の親父の眼と。そして深見進介は彼の金融口座帳に名を載せている客ではなかった。又そうした種類の客になる見込みのある客でもない。そうした金を借りに来る学生はもっと大まかな、もっと家庭のいい、「行き当りばったり」式の、親父の言葉で言えば、「その日の向き向きでことをやる人間」であった。

「うん、一寸お願いがあって来たんだけど。でも先に食事を済まそうかな。」深見進介は笑いのもどって来た親父の顔を見つめながら言った。

「食べてくかね。火は落したんだけど、まだ冷えちゃあいないだろう

「よ——まあ、上へお上りよ。」

「うん、食べるよ。せつかく寄ったんだから。」

「小泉さん谷口さん。皆さん奥に来て、賑かだよ。お上りなさいな。」

「うん、上らせてもらうけど、何があるの。」

「なんにもないんだよ、生憎今日は。おでんだけなんだがね。」

「何でもいい。おでん貰おうか。けど、その前にちょっと親父さんに頼みがあるんだがね。」

「おでんだってちっとも、冷えちゃいないよ、いま火落して、俺も一休しようと腰を落着けたばかりだからね。」親父はわざと気づかぬ風をしている。親父の顔はすでに余裕のある柔和な笑いを取り返し、それで武装している。たしかにこの笑いは商売用の武装である。この笑いの後に半ば機械になった彼の硬い心がある。長い失敗の人生の後でなお頑強に人々に抵抗しようとしながら、身体に比して極めて小さい魂を金銭に握られた男の心、金銭への執着が軋むような響きをたてる機械の心があるのである。そして、この小さい金銭の機械は学生の下宿に乗り込んで、辞書や衣類や時計やその大事な持物を抵当物件として取り上げる時、極度の疲労から古ぼけた埃をかぶった街工場のミールングのような音を立てることがある。しかしこうした疲労を伴う興奮がかえって彼の背骨をしっかりと内から支えて呉れるような感じが彼に少しの後悔も起させず、いっそう彼を駆り立てて彼の内の残り少ない「人間」を奪い去ってゆくのである。こういう一銭銅貨の色にも似た顔色をもった男は日本の社会にはしばしば見られる。これは日本の社会の奥底にある造幣局で製造される多くの人間の一人に過ぎない。そして先刻深見進介がこの親父の鼻を見ながら彼の父の顔を思い出したというのも、彼の父とこの親父とが一方は金貸しであり、一方は借り手に廻る方でありながら、社会の同じ場所所で製造された人間であることに変わりはなく、彼等の顔には同じ銅貨の模様が打ち出されているからであるとも言えるのである。

「どうもこの間から体の調子が悪くてね。」深見進介はまっすぐに親

父の鼻を見つめながら、わざと気づかぬ風をしている親父の心を感じ取り、話を持出すのを止めて言った。

「風邪でも引いたんじゃないの。顔色がよくないね。」

「……………」

「深見さんも体は強い方じゃないね。頸の長いものは体は華奢だって言うから。」

「……………」深見進介の心は次第に息苦しいものになって来た。なぜこのような何の意味もない話を続けなければならないのか。何が故にこの親父に背を向けて出て行くことが出来ないのか。ただこの親父に食費の借りがあるということが、これほどまでに自分をここに縛りつけるのか。彼は同じように親父の渦巻いた太い眉や左上の電燈の光の中に浮き出た肉の高い左頬などを眼を据えるようにじっと見つめていた。

「夜更しが体には一番いけないんだよ……熱はあるの。」

「熱はないんだけど。この間からの寝不足が応えたのかなあ。肩が凝って仕様がな。」

深見進介は頸を左右に曲げて見せた。ポキポキという音が頸の辺りでする。

「そりゃあひどい。そんな年でその肩凝らしじゃどうする。でも氣をつけたがいいよ。この頃急に冷えてきたからね。」三方に白木の大戸棚を据えた部屋の真中で、親父の大きな体がじっと動かない。茶の繻子地の座蒲団を置き、薄鼠の太い毛糸編のちゃんちゃんこを羽織った体が、磨きのかかった角火鉢に膝を押しつけ、胡坐にして坐っている。これが彼の人生との取引きの場所であり、ここで彼は生命ある人生と社会を小さい冷たい金に換算しようというのである。このとき彼の心は喜びにふくれ上る。学生達の抵抗力の弱い、柔かい心の上に躍りかかるこの半機械の金勘定の喜びの軋りを深夜誰が聴くのであろうか。深見進介は心が疼くように思った。

「この家なんか裏が山だもんだから、夜中に冷えること冷えること、

三時か四時頃ぴーんと冷気の降りて来るのがはつきり眼に見えるようだね。」

「……………」

「京都は冬が早いからね……」

「……………」

「わしは元来京都はすかんのだよ。」そして親父の顔に冷たい皮膚の笑いが戻って来た。

「……………」

「ところで、何の話だったね、頼みたいってのは。」親父は低い抑揚のない言葉で言った。そして、これが親父の真実の心の言葉であり、鼻の語調なのである。

「うん。食費、随分放って置いて済まないんだけど、今月は出来れば半分だけにして呉れないかなあ……」深見進介はようやくにして胸の中のものを押し出すようにして言った。

「そりゃあいかんよ。」抑揚のない太い声の下で親父の顔は柔かい笑いの武装に満されている。そして、これは先程から彼の頭の中に用意されていた言葉であった。「出来ればしてあげたいんだけど帳付けはやめにしてるんだよ。」

「……………」

「表通りの店で帳付けやってて、あまり気前よくやったもんだから結局回収できなくてね。」

「……………」

「うちは、娘とも相談して貸しはよすことにしたんだよ。お互いに気触くなるもだから。学生さんは自尊心が強いからね。」

「……………」

「どうしたって、自然水臭くなってゆくもとでねえ……」

「そうだろうね。」深見進介は静かに言った。しかし彼の心は、深い痛みを放っていた。「そんなんならやっぱちゃんと勘定して貰った方がよいんだなあ。ほんとに迷惑をかけて済まなかったよ。為替なん

だけど、これで受取ってくれるかしら。」彼の心の深みでは羞恥が炎を放っていた。彼は測りたい心の中で、彼の柔かい心が親父の心の冷たい機械に挟まれたもののように、自分の心の中の暗い羞恥の感情を隠そうとしながら、落着いたゆっくりした調子で言った。

「いいとも、いいとも。うちは小為替でもどうせ取換えりゃ一緒だよ。そりゃ御都合もありだろうが、そういうわけなんだからね。頂いておくよ。」

「……………」

「ええと、いくら頂くんだったかな。一寸調べて見ようかね。」

「……………」

「この頃は何かも値が張ってやり憎くって仕様がないう。市場へ仕出しに行っても一寸手が出せない始末で、今日も手ぶらで引返しき。

……そうしたって、定食の値段は上げたくないしね。」

「……………」

「学生さんだってこの時節じゃあ、やり憎いのはよく解ってるし、……。しかし学生さんは将来が身上さ……楽しみだよ。」

「将来がね。」深見進介はただ金銭に打ちのめされた心に落ち着きを取り返そうと努めながら言った。「その将来の身上が就職難なんだから世話ないよ。親父さん。」

「そう言ったもんでもないよ。自然に先は開けてくるよ……ええと、ちょうど四十六円二十銭になってるから、三円八十銭のお釣りになるがね。じゃあ頂いとくよ。どうも……」

「ほんとに済まなかったね。」親父の笑いの下の厚い錆色の顔が深見進介の心を遮っていた。彼はまともにその顔の奥にある奇怪な一つの心につかっていた。それは彼の未知の心であり、若者の柔かい芽のような心を押しつぶす測り難い心の在り処であった。そして釣銭を握った右手が親父の暖い掌に触れた時、彼は自分の手が慄うように後しざりするのを感じた。

「いや片づけときゃ、どっちも気持がいいもんだよ。まあ奥に上って

ゆっくりしてお行き……おい、千代子、深見さんに、おでんの定食、暖めてあげておくれ……。何、今、一寸と湯に行ってるんで、すぐ帰って来るよ。」

三

この鼻の親父との愚かな恥すべき交渉とその時味わった惨めな感情とを深見進介はずっと後まで心の底に秘めていた。《俺は何も知らないのだ、何もかも》これが彼の思いであった。一体親父の大きな鼻は彼に何を教えようと言うのか。半ば錆びついたこの人間の機械は彼が世の中に出て行った時、そして昂然と若者の頸を上げて世の中に挑戦した時、あまりにも多く彼の周囲を取りまいたのであるから。彼が暖簾の前を離れ、小泉清達の集っている奥の間に歩き始めた時、彼の少し窪んだ両眼の下の暗い暈のある辺りには、かすかに微笑が浮んでいたが、それはむしろ取り繕うた微笑であった。自分の金銭に対する無智に向けられた金銭の嘲りであった。彼はしばらく今自分の前で起ったことが何であったかをほつきり自分に知らせようとするかのように、また痛めつけられた感情に足を取られたかのように、親父の姿を隠している暖簾の前でじっと立っていた。が、やがて身を廻らせ奥の間の方に足を向けた時、小さく身体が慄えるのを感じた。彼は人の心の一つの特別な動きに触れたような感じを感じていた。親父の心が蔽いを取られてあらわになり、そのあらわな心のきつい接触を彼はどう処置していいか。それは侮辱でもなく羞恥でもなく、そのいづれでもあり、自分の金銭に対する安易な学生達に共通の考え方を激しく揺ぶられたのである。金は社会の骨格であると論じながら金になった心の存在を知り得ない学生達の心を持つ深見進介は、日頃金銭については他の学生よりも遙かに深い身に痛みを感じる考え方を持っている。種類（しゅるい）の書物を読みながら俺は結局何も知らないのだとその後もこの時（とき）のことを考えて思うことがあった。《鼻奴、鼻奴》彼はそんな時心に

言った。《江戸っ子の鼻奴》——深見進介の衝き上げられた心の片隅で熱を帯びた暗いこの言葉が、汚れた響きを発していた。彼はじっとこの汚い言葉を胸の中で見守るような気持で、奥の間の上り口に顔を出した。騒いでいた学生達は急に笑声を止め、一斉に皆の顔が彼の方を向いた。

「よう。深見大人の御入来。」赤松三男の押揃（おしぞろ）の聲が飛んで来た。

「よう。永杉派。」誰かが怒鳴った。

「永杉派がどうしたというんだい。」暗い畳の上から白々と声が浮く。深見進介はしばらく会わなかったこれらの同級生達のあらわな敵意をまるで心が滝に打たれたかのように感じ取っていた。彼は自分の前に展げた級友達の集りの風景を、何か挑みかかるような眼つきで眺めた。そして若者の心をとすると訪れるあの烈しい敵対の心でこの風景の中の一人一人を上から見下すように見つめた。暗い電燈の真下に、赤松三男と谷口順次とが足付きの将棋盤を囲んでいる。その横に美沢多一郎が足を組んで本を掲げている。美沢の後に床の間を背にして足を投げ出し、両手で斜め後にそらせた体を支え、眼をつぶった小泉清の顔が鈍く輝いて見える。江後保は一番奥の縁側（えんがわ）に身体を横たえている。暗い光の中でこれらの人々の顔の部分だけが煙草の煙に動く暗い光を反射して輝き揺れているように見える。《鼻奴、鼻奴》深見進介はなおも彼の中に呻（うな）っている言葉の嘲りのように自分の心に言い聞かせながら、人々の輝いている顔を次々と見渡していった。

「いつまでも、突っ立ってんと、まあ上へ上がれよ。」赤松三男が言った。円い鼻の上に眼鏡がずり落ちそうになっている。

「おばさん。」細かい飛白の谷口順次が、膝の上で将棋の駒を鳴らしながら、盤（ばん）を覗き込んだまま言った。「おばさん、じゃなかった。じゃあ、娘さんでもなおさらないやね。千代子さん、深見さんがおでんの定食ですよ。」谷口順次の声には嘲りの響きがあった。

「おでんの定食。」寝転（ねころ）んでいる江後保が、料理屋の仲居の口調を真似て言った。

「おでんの定食。」将棋を見るでもなく膝の上に岩波文庫を載せ、唇を円めて煙草の煙の輪を造っては時々将棋盤に吹きかけていた美沢多一郎が江後保の口調を引き取って言った。

「おでんの定食。顎の用心。」そして、深見進介の方を向くと、何か笑いを堪えているような細い頬が、奇妙に窪み、卑しい嘲笑するような表情がそこに見られた。

「顎の用心。」谷口順次が調子をつけて繰り返した。

「顎の用心。」赤松三男がそれに和した。そして皆の顔の上を何か光の波のように、薄ら笑いが次々と伝わってゆくように思えた。

「顎の用心か。ふふ……」小泉清の眼が開いた。そして上半身を両手で支えた姿勢のまま、さも物憂げに言った。

「誰だったかな、この間教室で言ったじゃないか。蒟蒻の深見か深見の蒟蒻か、か。」彼の顔は、電燈の円笠に遮られた光線のため煙草を喰わえた大きな口の辺りの他、暗い光の中にぼんやりしていた。

「へえ、何だか男女川みたいな話じゃないか……」谷口順次が言った。しかし誰も答えなかった。そして一座に沈黙が来た。

「それでおしまいかい。」深見進介はどつと自分の言葉の口の外へ押し出すような気持で、しかし一語一語をはっきり発音しながら言った。敷居に腰を下し、級友の一人一人の顔の上に視線を移しながら、彼は怒りに燃えて来た。

「……」皆は黙って答えらない。そして、冷たい視線が上り口の深見進介の上に集って来た。

「それでおしまいかい。え。革命家諸君。」深見進介はゆっくりと喋る言葉の中にあらわな敵対の心を籠めて言った。「何か一言言わんことには納まらんという連中にも困るじゃないか。それにしても俺にも変な人気があると見えるね。」そしてこの革命家諸君という嘲笑の言葉が皆を激昂させた。

「へえ。言いましたね。言わりましたね。」小泉清は、彼が不断は用いない関西弁を用いることによって、そこに揶揄の気持を籠めなが

ら、斜めに倒していた上半身を起した。顔の位置が動いて、暗鬱の色はないが幾らか憂鬱を保った長い形のいい顔が電燈の光の中にぱっと現われた。瘦せているが強靱な身体。黙っていると気むずかしそうなかなりの年齢以上の表情ではあるが、力強い臉はその表情を裏切り若さが溢れていて、疲労の影はつけているものの決してこの人間は対人関係に於いて消極的ではないことを示している。着込んでいる学生服の肘のところが擦り切れて、下に着けた毛糸のシャツが覗いている。深見進介は黙った。小泉清の体をもてあましているような動作の中にも、彼は小泉清の圧しつけるような神経を感じた。

「問題はね、深見進介の内部にあるんではなくて、外部にありさ。」小泉清は、深見進介の射抜くような眼をじっと見返しながら落ちついた調子をわざと人々に見せびらかせているかのように、ゆっくりとした声で調子を低めて言った。強い自尊心の破片がその声の中にはあった。「甘い蒟蒻には顎の用心。」谷口順次が盤の上の飛車を大きく動かしながら言った。「ひとの悪口は、どうもわしゃ苦手やわいな、と。」横顔の薄い彼の顔は尖った鼻の部分がきつい線をつけて電燈に光っている。彼は時々胡坐の膝を小刻みに揺り動かしながら考えこむこともなしにさっさと駒を動かした。

「顎の話なんかしなさんなよ、失礼だわよ。」美沢多一郎がおどけた調子で言った。一座はどつと笑いを上げた。深見進介は顎という渾名を持っていたのである。

哀れな学生達の自尊心を点綴した食堂の奥の間の風景が展かれていった。青年の集りに特有の各自の独自性を相手に認めさせようとする工夫、それに伴う心理的抵抗、および精神の焦躁が暗い電燈の下でひしめいていた。しかしながらそうした青年の心理の闘争以上にこの深見進介の経済学部同級生達には、深見進介を共同の敵と目しているような空氣が流れていた。そしてその空氣を導いているのが小泉清であると認めることが出来た。しかしまた小泉清に限らず同級のものは、特に成績の優れた鋭敏な神経を持つ者は、深見進介に威圧